

講演会「水無瀬駒製作と時代背景」

令和元年10月20日（日）

歴史文化研究所 調査員

小泉 信吾 氏



水無瀬駒は水無瀬兼成が突然と作りだしました。そのメモ帳である『将棋馬日記』（通称『駒日記』とします。）が水無瀬神宮に保存されています。いつ頃から将棋の駒を書き駒で作ったかという記録はありません。兼成の祖父にあたる三条西実隆は能書家として、また華道でも有名で当時の一流の文化人でした。『実隆公記』によると、駒文字を書いてくれという依頼があったようですが、どういう駒文字かは実物が残っていないのでわかりません。

実隆の子の三条西公条は、記録では駒文字は書いていません。この三条西公条の次男が水無瀬家の養子になり水無瀬兼成となりました。兼成は書家としても有名なので、駒文字を書く依頼が増えています。駒日記によると、戦国武将、貴族、公家、天皇、有力商人などに駒を書いています。

水無瀬駒を製作したのは、兼成と養子になった親具、兼成の嫡子の氏成、孫の兼俊です。現在残っているのは水無瀬兼成と孫の兼俊の駒です。水無瀬駒を復刻した駒師の熊澤さんが『柾』という雑誌に、駒の製作数をまとめられています。それによると、始まりは天正18（1590）年、終わりが亡くなる1602年。駒数37108枚でかなりの数です。1590年代は、秀吉が天下統一をして世の中が落ち着く頃で、将棋の駒だけではなくて和歌、お茶、花など文化的なものが凝縮されて非常に高度になってくる時代です。その中で作られた水無瀬駒は非常に品のある駒です。

駒の製作は、駒を削る職人を水無瀬家で抱えていて、注文があると職人が駒を作り、水無瀬さんが駒文字を書くという形で製作していたと思います。ですから何百枚もの駒を一気に納めるということは、それなりの対価を要求できたと思いますが、それについては書かれていません。

駒を納めた主たる先は、豊臣秀吉で、次に秀次です。秀次は秀吉に秀頼が生まれたことで、自害に追い込まれますが、その前に貴族の間では秀吉の後継者は秀次だということで、駒を大量に納めています。記録によると、山崎の戦いが終わった時に、兼成は天皇の勅使として秀吉のところに行って会っています。秀吉が亡くなった後、秀頼にも駒を献上しています。単に駒を作っただけではなくて、その時代背景が駒日記からわかります。

慶長3（1598）年に、「象牙道休」と書いています。足利義昭が將軍を辞した後の名前が道休です。しかし、慶長2年に足利義昭は亡くなっているので、慶長3年に象牙の駒を道休に納めるというのは矛盾します。今後の研究でもっとはつきりするかなと思います。その駒は、現在福井県の方がお持ちです。実際、『駒日記』には象牙の駒が何組かありますから、その一部であるというのは確実にいえます。

次に、考古学の話です。旧大阪市文化財協会が大阪城下町を発掘した時に出土した「銀将」と「桂馬」、それから京都の御土居から出土した「銀将」の駒を比較すると、私の判断では水無瀬駒とまでは言いませんが水無瀬の範疇に入る、あるいは水無瀬を写した駒といえると思います。水無瀬駒は分厚いです。そういうことで出土駒からみると、大阪・京都近辺にこの水無瀬駒は出ています。

次の奈良時代初頭の平城宮の軒丸瓦は複弁蓮華文であり、周囲に珠文帯と線鋸歯文が施されています。軒平瓦は均整唐草文です。奈良時代以降は、この均整唐草文が軒平瓦の文様の主流となります。

次に東大寺の瓦です。文様は同じく軒丸瓦には複弁蓮華文、軒平瓦には均整唐草文を採用しています。東大寺は、天平 15 (743) 年に大仏殿造立の詔が発せられて、天平宝字 2 (758) 年に大仏殿が竣工しています。その大仏殿建立に大きな役割を示した行基は、東大寺造営以外にも多くの寺院造営や土木工事に携わった人物です。島本町内では、若山神社や勝幡寺、尺代地区の釈恩寺、大山崎町の宝積寺が行基の開創だといわれています。『行基年譜』によると、山崎院や山崎橋が行基によって造営されており、大山崎町周辺では実際に行基が活動していたことを知ることができます。

では、鎌倉時代の瓦に移ります。東大寺大仏殿は、治承 4 (1180) 年に平重衡の焼き討ちによって焼失し、その再建に尽力したのが重源です。重源は地方から資材をかき集めて東大寺の復興を行った人物だといわれています。今回展示している軒丸瓦・軒平瓦も岡山県（備前）の万富窯で焼かれ、東大寺へ運ばれたものです。文様面に「東大寺大仏殿」と寺院やお堂の名前が書かれているのが特徴的で、展示している瓦の中で最も大きいものです。建仁 3 (1203) 年に藤原定家が水無瀬離宮を訪れた際に重源と会っており、同年の東大寺総供養の際には後鳥羽上皇も参列しています。

では次に水無瀬離宮の瓦も見たいと思います。水無瀬離宮は正治元 (1199) 年頃に後鳥羽上皇が造営した離宮で、その中心地は現在の水無瀬神宮付近だと推定されています。水無瀬離宮の範囲は文献や地形、検出した遺構の位置から、現在の広瀬や百山、桜井地区にまたがるものと考えられます。水無瀬離宮関連施設は、広瀬遺跡と西浦門前遺跡で見つかっています。宝相華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦は広瀬遺跡から出土したもので、中房に円を記す複弁蓮華文軒丸瓦と剣頭文軒平瓦は西浦門前遺跡から出土したものです。広瀬遺跡の瓦は甍棟の部分、西浦門前遺跡は築地塀に使用されたもので、同時期の東大寺の瓦と大きさの違いを見ていただきたい思います。

特殊な瓦も帝塚山大学よりお借りしているので、紹介したいと思います。

次の軒丸瓦・軒平瓦の文様は、宝塔文と呼ばれる瓦の中でも五輪塔を描いたもので、平瓦には五輪塔の文様が押印されています。軒丸瓦は蓮華文様か巴文様、軒平瓦は唐草文が採用されることが多い中、珍しい文様のものです。

安土桃山時代には、瓦の文様面に金箔を貼る金箔瓦や朝鮮半島から伝來した文様部分が逆三角形を呈する滴水瓦が登場します。

今回は、平瓦凸型成形台・平瓦凹型調整台・丸瓦凸型調整台・桔梗文の軒丸瓦の窯など瓦を造るための道具もお借りしました。近世以降の瓦生産は「江戸名所図会」に、その様子を見ることができますが、近世以前の瓦生産もほぼ同じ工程で製作されていたものと思われます。

終わりにですが、本企画展では、東大寺の瓦を焼いた窯ではないかと考えられていた鈴谷瓦窯跡と、東大寺の瓦や同時期の瓦との比較を行いました。鈴谷瓦窯跡が東大寺造営の年代が一致しないので、東大寺の瓦を焼いた瓦窯跡であるとは言い難いですが、鈴谷瓦窯跡は島本町の地域史を語る上で重要な遺跡であると考えます。軒瓦が見つかっていませんので、鈴谷瓦窯跡の瓦がどこに供給されたのかを探ることは難しいですけども、もし解明できたら島本町の古代の豪族の支配関係や国家との関わりを探ることができる重要な遺跡だと考えます。ご清聴ありがとうございました。

事業報告

企画展・催物一覧

開催日	企画展名
令和元年6月1日（土）～7月21日（日）	企画展 「水無瀬神宮の社宝」
令和元年7月24日（水）～9月1日（日）	企画展 「町内発掘調査成果速報展」
令和元年10月2日（水）～12月3日（火）	企画展 「鈴谷瓦窯跡と東大寺」
令和元年10月20日（日）	「水無瀬駒 関連資料」の実物展示
令和元年12月5日（木）～令和2年1月26日（日）	企画展 「島本の神事」一尺代・大沢 御頭渡し
令和2年1月29日（水）～3月1日（日）	企画展 「むかしのくらしと農家のしごと」

開催日	催物
令和元年5月26日（日）	第81回コンサート「チェロとピアノのコンサート vol. 4」
令和元年6月1日（土）	講演会「後鳥羽上皇と水無瀬神宮」（講師：水無瀬 忠成 氏）
令和元年6月2日（日）	講演会「国宝 後鳥羽上皇像と鎌倉時代の肖像画」（講師：井並 林太郎 氏）
令和元年6月9日（日）	第82回コンサート「松永昌子ピアノで綴る旅シリーズ Part VI フランス」
令和元年6月16日（日）	講演会「後鳥羽天皇の書」（講師：羽田 聰 氏）
令和元年6月22日（土）	講演会「世界最古の写真印刷技法 コロタイプ技法」（講師：山本 修 氏）
令和元年6月23日（日）	第83回コンサート「うたのつどい～歌にのせて～」
令和元年6月30日（日）	第84回コンサート「フランスへ想いをはせて～フルート・ピアノ デュオリサイタル～」
令和元年9月29日（日）	第85回コンサート「上田哲子 ヴァイオリン デュオリサイタル」
令和元年10月5日（土）	体験講座「瓦ストラップ・マグネットづくり」
令和元年10月6日（日）	講演会「島本町と東大寺」（講師：木村 友紀 氏）
令和元年10月19日（土）	体験講座「瓦拓本体験」
令和元年10月20日（日）	講演会「水無瀬駒製作と時代背景」（講師：小泉 信吾 氏）
令和元年10月27日（日）	講演会「やさしい古代瓦の歴史」（講師：清水 昭博 氏）
令和元年11月10日（日）	第86回コンサート「藤原靖彦 リコーダーリサイタル ～17世紀のイタリアとドイツのバロック音楽を楽しむ～」
令和元年11月17日（日）	第87回コンサート「福井英里子 ヴァイオリンリサイタル vol. 5 ～リズミックな名曲を集めて～」

公募による催物一覧

開催日	内容
平成31年4月12日（金）～4月18日（木）	「シルバー水彩画展」 絵画クラブ
平成31年4月21日（日）	「第6回島本音楽フェスティバル」 島本町商工会青年部
令和元年5月5日（日）	「若山神社の祭礼」
令和元年5月19日（日）	ガールスカウト大阪府第90団
令和元年5月21日（火）	童謡クラブ
令和元年5月28日（火）	「第9回詩吟発表会」 直心・青葉吟詩会
令和元年7月2日（火）～7月9日（火）	「七夕飾り」 島本竹公房
令和元年7月6日（土）	古民家再生協会大阪
令和元年7月7日（日）	「しまもと手づくりコミュニティ市」
令和元年8月25日（日）	「かぐや姫のタペ」 島本竹公房
令和元年9月11日（水）～9月16日（月・祝）	「写友島本第13回写真展」 写友島本
令和元年10月13日（日）	「英語スピーチ学習会」 島本国際交流協会
令和元年10月22日（火・祝）	童謡クラブ
令和元年10月27日（日）	「島本の森を歩き島本の木で作ろう」 島本の森と水と健康を考える会
令和元年11月9日（土）	「英語講演会」 島本国際交流協会
令和元年11月10日（日）	「島本の森を歩き島本の木で作ろう」 島本の森と水と健康を考える会
令和元年12月14日（土）	古民家再生協会大阪
平成31年4月～令和元年10月 毎週火・木・土曜日	「朝市」 島本町農業振興団体協議会
令和元年11月～令和2年3月 毎週火・土曜日	

体験講座 「瓦ストラップ・マグネットづくり」

日程：令和元年 10 月 5 日（土）

町内埋蔵文化財包蔵地である広瀬遺跡では、土器以外にも水無瀬離宮で使用されたと考えられる瓦が出土しています。

出土瓦の文様の範型と石粉粘土、ストラップ金具、磁石等を使用して、瓦の文様のストラップとマグネットを作成しました。



体験講座 「瓦拓本体験」

日程：令和元年 10 月 19 日（土）

企画展「鈴谷瓦窯跡と東大寺」の開催期間にあわせて、拓本の体験講座を開催しました。

当初 2 日間を予定していましたが、内 1 日は残念ながら台風で臨時休館となり中止となりました。

拓本体験には、実際に発掘調査で出土した瓦を用い、体験者はいろいろな文様の拓本に挑戦をしていました。

また、幅広い年代の方々にたくさんの方々にたくさんの参加をいただきました。



資料館ボランティアの活動報告

1 期、2 期のみなさんと資料館担当職員で毎月一回の定例会を開催しています。

資料館内外で企画される活動に参加・協力いただき、特に団体予約で説明を希望される来館者への解説や、対応をしていただいている。

また、「むかしのくらしと農家のしごと」展の体験学習コーナーでは、毎年協力していただいている。



企画展 「島本の神事」一尺代・大沢 御頭渡し

展示期間：令和元年12月5日（木）～1月26日（日）

島本の神事展では、現在も町内の各地域で引き継がれ行かれている「祭事」の様子を写真パネルで紹介しています。

今回は町内の最北に位置します『大沢・早尾神社』と『尺代・諏訪神社』の年頭行事『御頭渡し』をご覧いただきました。

御頭渡しは、年の始めに御頭人が交替するにあたり、本年の無事と五穀豊穣を祈願する神事として行われています。



企画展 「むかしのくらしと農家のしごと」

展示期間：令和2年1月29日（水）～3月1日（日）

冬期恒例の常設展示となりました本展は、昔使われていた民具や農具を展示し、むかしのくらしと農業について紹介しています。

令和元年度も縄ない機や足踏みミシンなどの体験コーナーを設け、多くの方に体験していただきました。

毎年、社会科の体験学習に訪れる町内の小学3年生も積極的に体験し、楽しそうな様子でした。また、高学年になっても繰り返し訪れてくる子どもたちと再会できることは、職員の喜びでもあります。



「水無瀬駒 関連資料」実物展示

展示期間：令和元年10月20日（日）

小将棋（八十二才銘）漆書、中将棋（八十六才銘）墨書の展示を行いました。普段は複製品の常設展示を行っていますが、毎年秋に実物を観ていただく機会を設けています。

同日には、「水無瀬駒」に関連した講演会を開催しました。

「水無瀬駒」が作られた時代背景や関係した戦国武将の話など、あまり知られていない水無瀬駒の話を聞く事ができました。

若手棋士の活躍もあり、将棋に興味を持つ方々が増え、「水無瀬駒」がテレビドラマでも取り上げられるようになりました。



企画展 「町内発掘調査成果速報展」

展示期間：令和元年7月24日（水）～9月1日（日）

平成30年度は水無瀬離宮跡、埋蔵文化財包蔵地外の百山地区の2件の調査を実施しましたが、百山地区の調査では、遺構・遺物の存在が希薄だったため、水無瀬離宮跡の調査成果を中心として紹介しました。

水無瀬離宮跡は、後鳥羽上皇が造営した水無瀬離宮の中心地と考えられており、今回の調査では、鎌倉時代以前から存在する溝跡を検出しました。水無瀬離宮跡に関連する施設は検出されませんでしたが、溝跡南岸付近からは、鎌倉時代前半頃の羽釜などの煮炊具が多く出土しており、この溝跡の南で生活していた人々により投棄されたものと考えられます。



企画展 「鈴谷瓦窯跡と東大寺」

展示期間：令和元年10月2日（水）～12月3日（火）

鈴谷瓦窯跡に焦点をあてて展示を行いました。

昭和29年に本町山崎地区で発掘調査が行われ、登り窯2基が存在することが確認されました。

この瓦窯跡は「鈴谷瓦窯跡」と名付けられ、その所在地が東大寺（奈良県）の荘園である「水無瀬荘跡」と隣接していることから、東大寺に瓦を供給した瓦窯と考えられてきました。

現在、東大寺に供給された窯跡ではないことが明らかとなっていますが、本町の歴史上、重要な遺跡であるため、鈴谷瓦窯跡やその工房跡と考えられている御所ノ平遺跡の出土遺物や調査図面等を展示了しました。

また、瓦を多く収蔵している帝塚山大学附属博物館と共に展示し、鈴谷瓦窯跡出土瓦と東大寺で使用された瓦や飛鳥時代末～奈良時代初頭の瓦を比較する展示を行いました。



講演会「やさしい古代瓦の歴史」

令和元年 10 月 27 日（日）
帝塚山大学教授・附属博物館館長
清水 昭博 氏



島本町には鈴谷瓦窯跡という非常に学術的に重要な遺跡がございますので、瓦の歴史と、鈴谷瓦窯についてお話をさせていただきます。

瓦の歴史は、日本で最初の本格的寺院である飛鳥寺が造られた 1400 年ほど前にまで遡ります。飛鳥寺は非常に大規模なお寺で、約 20 万枚の瓦が使用されました。屋根の構造上、鷲尾、垂木先瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦など色々な種類の瓦が作られています。飛鳥寺の瓦は、崇峻元（588）年に、百濟から来た 4 人の瓦職人が作りました。そして、飛鳥寺から出土した平瓦に、須恵器に使うて具の痕跡が出てきことから、日本最初の瓦は百濟の技術者と日本の須恵器の職人が合同で作ったことがわかります。山の斜面をトンネル状に掘って床面を階段状にした構造の窯が飛鳥寺のすぐ近くで見つかっています。また、飛鳥寺の瓦と非常によく似た瓦が、奈良県五條市、御所市、藤井寺市でも出土していることから、複数の窯で作ったこともわかっています。

その後、飛鳥寺に続く寺院建設とともに瓦が全国で作られます。飛鳥寺の軒丸瓦のデザインは、仏教の象徴である蓮華の文様です。百濟の職人が作ったので、百濟の瓦と似たデザインをしています。飛鳥寺の次に作られた法隆寺と四天王寺の瓦の文様は同じ木型で作られているので、瓦職人が共通するのかもしれません。また、山背の高麗寺、河内の衣縫廃寺の瓦も飛鳥寺と同じ木型の瓦が使われていることから、大和を中心に瓦作りが広がっている姿が窺えます。

その後、大化の革新（645 年）前後に瓦のデザインが変化します。飛鳥寺の瓦は蓮の花ですが、645 年前後に登場する瓦は単弁蓮華文です。このデザインも 640 年より少し前に百濟で流行していて、それが日本に入ってきた。この瓦は奈良県桜井市にある吉備池廃寺で出土しています。この遺跡は 639 年に舒明天皇が建てた百濟大寺という説が有力で、その背景に百濟の影響が想定できます。

次に、天智天皇のころに、複弁蓮華文というデザインの瓦が登場します。天智天皇が母の齊明天皇の菩提を弔うために建立した川原寺が最初にこの瓦を使ったようです。このお寺が建てられた 660 年代は百濟が滅亡した年にあたり、百濟からの亡命者の中にいた技術者が瓦を作ったと想定できます。川原寺式の瓦が全国に普及している背景は、天智天皇や天武天皇の仏教政策によるものです。飛鳥寺から瓦が作られた約 100 年間は、瓦がお寺でしか使われていません。その後、お寺以外の施設で瓦が使われたのは藤原宮からです。この時から瓦はお寺の独占品でなくなりました。実際に藤原宮に使われた瓦は、川原寺の瓦と近い図柄をしています。藤原宮は 1 キロ四方くらいもある大きな施設で、そこで使う瓦は推定で 200 万枚になります。それを 694 年に都を遷す時に合わせて作らなければいけません。藤原宮の瓦は、多くは大和で焼いていますが、他に讃岐や淡路島、琵琶湖の近くの瓦窯など西日本諸国を中心にたくさん施設で焼いていることが確認されています。そ

兼俊の後、京都から江戸のほうに文化が移って、3代将軍家光のお姫様が輿入れする時に、国宝になっています初音の調度というものの中にも駒がありまして、それをみると安清と書いていたので、水無瀬から派生したと思います。なぜ1602年以降、兼俊の頃の記録が残っていないかというと、たぶんある程度の大名、公家、商人に、駒がいきわたって需要がなくなってきたのか、あるいは水無瀬から派生した安清なり、守幸という駒も関東に行って京都にはなくなったということです。

時代背景でもう一ついえるのは、秀吉が京都に聚楽第を建てて天皇を迎えた時に諸大名や公家を集めてお金を配るんです。金配りというは日記にも出ています。その1年前に大判や銀銭を秀吉が大量に4万枚くらい作るんですね。その財力の源泉は、銀山金山を全部おさえていまして、自分のところで貨幣を管理して、その数分の一を大名や公家に配るわけです。聚楽第に並べて配ったという記録があります。それに呼応して、秀次が関白になった時に駒を納めています。その後秀次は、自害させられて、聚落第も壊されます。ですから聚落第周辺から、駒が出てこないかなと思っているのですが、この御土居から出土しているものもその関係かなと思います。

では納めた大将棋はどこへいったのかと思うんですけども、全然ないんです。水無瀬家に残っている大将棋、中将棋、小将棋の駒しかない。もし大将棋の駒があれば、実際に納めたというのがわかります。私の研究では、水無瀬さんが納める際に中将棋以降、大将棋、大々将棋、魔詞大々将棋、大将棋というふうにして納めたとするとかなりの駒数になるので、それにあたう対価を秀次あるいは秀頼からもらったと思います。関ヶ原で負けましたけども、まだまだ豊臣家には財力がありまして、家康はその財力を心配していたわけです。そこで方広寺鐘銘事件というのがあります、方広寺の大仏作る時に豊臣家にあった金を使わすんですね。

『駒日記』をつぶさに読むと、等安、木庵というのが出てきます。それを調べたら長崎奉行の村山等安という方で、後に失脚するんですが、その人が水無瀬兼成に駒を依頼しているわけで、そういう経済的な流れもわかるので『駒日記』は非常に面白い要素があります。ただ兼成が注文者の名前を省略して書いているので、官位、あるいは公家はわかりますが、通称で書かれている場合はわかりません。あと2~3年くらいかけて調査すれば、単に水無瀬さんが駒を作ったではなくて、いろんなことがわかると思います。

また、『象戯圖』を見ると、あれだけの巻物を一字も間違わずに書いています。これはすごいことです。この巻物は、秀次、あるいは秀吉に納めた時の控えだと思います。中将棋の製作は実際に経験しているから職人さんもすぐ作れます、大将棋、大々将棋、魔詞大々将棋となると、駒数だけでも多いですから、『象戯圖』を見ながら作っていた可能性が高いです。

今後、三条西実隆が書いた駒がどこかの貴族の館から出してくれれば面白いと思います。時々整理しきれていない貴族の蔵から新たに駒なり、こういう駒日記が発見される可能性もあります。

逆にいえば、水無瀬さんにこの象戯圖と駒がよく残っていたと思います。その辺は応仁の乱など戦乱があって、あるいは戦乱以外に鴨川の氾濫、あるいは大きな火事もあります。幸い水無瀬は京都から離れていて戦火を逃れていたので残ったのかなという気もします。

そう思って水無瀬駒を見ていただくと、やっぱり品格のある美しい駒がこの時期に完成していたといえます。五角形の駒の中にゆったりと書かれた完成美だと思います。これ以上のバランスのとれた文字の配置というのは、これ以降あまりないです。その筆法で書かれている『象戯圖』ですから、ご覧になっていただいたらと思います。